

文化の客体化の場としての学校 — 豪州クイーンズランド州におけるアボリジニ教育の事例より

京都府立医科大学 中西直和

一般的に、学校教育は「伝統」や「真正性」に基づき文化や知識を次代に維持・継承する側面と新しく文化や知識を刷新・創造する側面をもつ。しかし、ホブズボウム(E. Hobsbawm)が指摘しているように、「伝統」という枠組は歴史的状況のなかで創造された場合が多く、文化は常に変化し「真正性」を保つことが困難な状況にある。

近年のオーストラリアのアボリジニの教育について考えてみると、植民地政策の進展の過程で、アボリジニが伝承してきた言語、神話的世界観、あるいは日常的慣習などは強制保護区のリザーブでのキリスト教教化を通じてかなりの部分が消滅に至らしめられた。多文化教育が普及した現在でも、オーストラリアの公立のハイスクールでは、アングロ・オーストラリア文化に即したナショナル・カリキュラムが中心的にすえられ、補完的に民族教育や多言語教育が配置されている。とりわけ、消え行く原初文化と見なされたアボリジニ文化に基づく知識、思想、あるいは言語などは、人類学者のエントロピックな語りで標本化されることはあっても、アボリジニ自身が主体的に題材を構成し学ぶといった機会は与えられなかった。

しかし、アボリジニが自らの生活の方法を自律的に選択していくことを目的とする1972年の「自己決定政策」の採用以降、アボリジニ・コミュニティにおける文化再生運動に伴い、アボリジニ教育の機会や方法が検討されるようになってきた。ここで、文化再生とは消滅しかかったり抑圧されていた「伝統」や「真正性」を本質主義的に復元する行為ではなく、植民者側から政治的に動員され付与されたアボリジニ像を払拭し、アボリジニ自らが自文化の構成要素を選択的に抽出し、その価値を表象する「文化の客体化」の行為に他ならない。それは、自文化の過去と未来を創造的に結びつける「対抗的語り」(counter narrative)のな

かで実現可能となるものである。

本報告では、このようなアボリジニの文化再生運動に伴う、アボリジニ教育の本来の意義について、1972年の自己決定政策とともに私設された北クイーンズランドのワンゲッティ・エデュケーション・センター(Wangetti Education Centre)における自律教育と、公立のスミス・フィールド・ハイスクールの民族教育の実践を通じて検討する。そして、両校のアボリジニ教育のなかで、アボリジニ側から「文化の客体化」がどのような文脈でなされ、客体化に伴うアボリジニ生徒とアボリジニ以外の生徒や教師の反応を、スライドをまじえながら検証する。

本報告に際して、1997年の夏休みに両校に参与観察とアンケート調査からなる第1次調査に出かけ、本年夏休みにはワンゲッティの方へボランティアの補助講師として絵画を指導した。

結論的には、公立のスミス・フィールド・ハイスクールでは、隣接のキュランダ地域に多く在住するジャプカイ族の子弟のために、週1時間程度のジャプカイ言語プログラムが設定されている。多くのアボリジニの生徒は、昨秋新設のキュランダ・ハイスクールに転校したのだが、ここでもジャプカイ言語プログラム以外に主たる民族教育は展開されていない。また、このような言語プログラムを通じて「文化の客体化」が行われたかといえば、白人や他の移民の生徒に対して、ジャプカイ族の存在や言語の再生がアピールされた程度で白人生徒のアボリジニへの偏見に対抗して、自文化を表象し自信を得るまでには至らなかった。

一方、ワンゲッティではアボリジニとアイランダーの各部族や各地域のもつ固有性や価値が、絵画や陶芸などの創作の時間を通じて、相互理解や相互評価が培われている。自律学校の試みは少数だが、生徒は自文化に対する自信を得やすい。